

環境省熱中症予防声かけプロジェクトに向けた政策提言
～オリンピックを活用したプロモーション～

多摩大学 相原ゼミA

大堀あゆみ 金井成仁 神澤要宇 重原有紀

1.熱中症予防声かけプロジェクトの現状

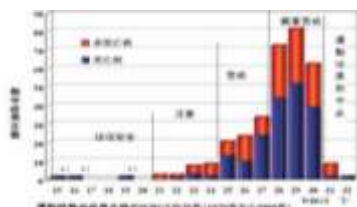
2010年の熱中症搬送者数は56,119人、死亡者数は1,707人であった。そこで環境省は、2011年以降の熱中症患者数を減少させ、不慮の死を避けるために「熱中症予防声かけプロジェクト（以下本プロジェクト）」を始めた。本プロジェクトは国民運動であり、その目的は『休息をとろう』『飲み物を持ち歩こう』『声をかけ合おう』『栄養をとろう』『温度に気をくばろう』の5つの声かけを国民それぞれが実行することにより、日本国民全体で熱中症を防ぐことを心がけるようにすることである。

現在本プロジェクトは、企業会員は1店舗（事業所）につき1,050円の年会費で、行政・民間会員は無償で賛同会員になることができる。プロジェクトを運営し続けるには、賛同会員を増やし年会費収入を得なければならない。そこで、本プロジェクトでは、賛同会員の増加に力を入れており、実際に賛同会員数は増加傾向にある。しかし、熱中症患者数減少を目指すには世間に本プロジェクトの認知度をあげ、日本国民一人一人が危機感をもって声かけを行うようにPRしなければならないが、そのような活動をほとんど行っていない。そのため、我々は本プロジェクトに向けた政策提言を行う。

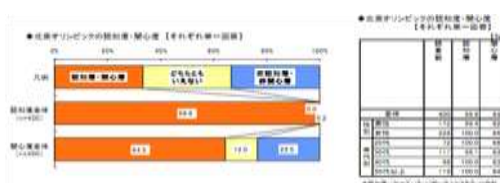
2.熱中症とスポーツ

スポーツにおける熱中症発生時期は7月下旬と8月が特に多く、気温が高ければ高いほど熱中症にかかる人数が増加する。（図1）

2004年アテネオリンピックの女子マラソンでは82名中16名が棄権、金メダルの野口みずき選手、銀メダルのヌデレバ選手も、ゴール直後熱中症で嘔吐に苦しんでいた。その他、2008年北京オリンピックの開会式では570人以上の人が熱中症で治療を受けた。この様に熱中症とスポーツは大変関わりが深いため、日本国内で認知度が99.8%と大変高いオリンピックを本プロジェクトの認知度を上げるために使用する。（図2）



(図1) 環境省熱中症環境保健マニュアル2011年5月版



(図2) 北京オリンピックに関するアンケート調査結果

3.オリンピックと環境問題

現代のオリンピックは、環境問題に対処しながら成功を収めてきた。例えば2006年北京オ

オリンピックはグリーンオリンピックというコンセプトで行われ、都市全体の環境の質の改善、人々の環境の意識の向上などを行ってきた。確かに、現在地球上の最大の問題は環境問題である。環境を気にすることはオリンピック自体の価値を上げる。しかし、現在オリンピックは最も重要な問題を見落としている。それは、人間の生命に関わる問題だ。

Michael Payne[2008]は、オリンピックには『スポーツマンシップ』『教育』『夢』『団結』『平和と幸福』の5つの価値が存在するとある。これら5つの価値は、人間が生きることが前提である。そこで、4年に1度夏季に行われるオリンピック中に、観客、選手などオリンピックに関わる人が熱中症にならないようにすることが重要だ。この問題を解決することが、オリンピックの価値に正の影響を及ぼすと考える。

4. オリンピックと提携した推進体制の構築

BOC(British Olympic Committee)は、オリンピックの文化プログラムである『カルチュラルオリンピアド』の主要プログラムの1つで、ブリティッシュカウンシルと連携して『Unlimited』を行っている。『Unlimited』は、障害のあるアーティストが世界各地で作品を展示できるようにしているプログラムである。

JOC(Japan Olympic Committee)へのプロモーションは、BOCとブリティッシュカウンシルの提携の例のように、JOCの文化プログラムの1つとして熱中症予防の声かけを行うことを提案する。例えば、本プロジェクトが教育プログラムとして小・中・高校の体育教師に熱中症予防対策講座を開いたり、プロアマ問わず、観客を100人以上集めるようなスポーツイベントでパンフレットやうちわを配るなど、国民に予防教育を行うことである。

IOC(International Olympic Committee)へは、『2016年リオデジャネイロオリンピック以降、熱中症患者を出さない』を目標としてプロモーションを行う。熱中症は、日本国内では1つの社会問題になっているが、世界各国では認知度が低い。オリンピック開催時は世界各国から選手や観光客が集う。リオデジャネイロの6月は冬だが、平均最高気温は29度となっており、30度を超える日が少なくない。緯度が高い国から観光に行く人は、気温差が高く、熱中症になる可能性が大変高い。そこで、本プロジェクトのパンフレットをポルトガル語や、英語、中国語など多数の言語に翻訳して配布し、熱中症を認知してもらう。その他に、開会式や試合観戦中の観客にできる限り水分補給を促すために、飲み物を配る活動をIOCのスポンサーであるCoca Cola社に行ってもらおうなどの提案をする。

<資料・文献>

Michael Payne(2008) オリンピックはなぜ、世界最大のイベントに成長したのか
環境省熱中症環境保健マニュアル 2011年5月版

株式会社ジーコム生活行動研究所(2008) 北京オリンピックに関するアンケート調査結果